



新橋アスレチックと  
平岡熙(2列目中央)  
所蔵：野球殿堂博物館

## 鉄道人物伝

No.14

### 野球を広めた 鉄道技術者 平岡熙



平岡熙

小野田 滋 / 情報管理部 担当部長

#### ■ アメリカで鉄道車両技術を習得する

平岡熙<sup>あつせん</sup>は、1856(安政3)年8月19日に箱館奉行の下役であった平岡庄七の長男(幼名・庄次郎)として、江戸の本所で生まれました。庄七は徳川御三卿のひとりであった田安家の付家老となったのち明治維新によって静岡に隠居しましたが、同じ徳川御三卿であった清水家の再興をめぐる新政府の大隈重信と折衝を重ねたことをきっかけとして大隈の信任を得、のちに内務少丞(内務省の官吏)として出仕して名を熙一と改めました。その清水家の当主であった清水(のち徳川姓)篤守がアメリカのコロンビア大学に留学することとなりましたが、清水家再興の褒賞を兼ねて平岡熙にも学費が支給され、渡米を決意しました。

日本人渡米者53名を乗せたアメリ

カ号は、1871(明治4)年6月23日に横浜港を出帆して、同年7月15日にサンフランシスコ港に入港しましたが、港で初めて見た蒸気機関車(日本の鉄道はまだ建設中)に強い印象を受け、2年前に全通したばかりの大陸横断鉄道を利用してニューヨークに到着し、清水と別れたのちボストンへと向かいました。

ボストンの小学校に入学した平岡は、語学の習得も早く、成績も優秀であったため、短期間で文典学校(中学校相当)に進みました。1872(明治5)年には、渡米した岩倉使節団と合流し、平岡は通訳兼案内人として、使節団の副使であった伊藤博文(当時は工部卿)の知己を得ました。

平岡は、1873(明治6)年に工業専門学校へ進学しましたが、教師からワシントン大統領を尊敬することを強要されたため、これに反発して中退してしまいました。このため、同年5月にボストンにあったシンクリー・ロコモティブ会社に工員として入社し、同年12月にはニューハンプシャー州にあったマンチェスター・ロコモティブ会社に転じました。1875(明治8)年にはニューハンプシャー州勸業博覧会で器械製図の二等賞牌を獲得したほか、翌年1月には製図および器械運転の免許を取得して、ボストン〜メイン間の機関車運転にも従事しました。

平岡は、この頃から会社の野球チームの選手としても活躍するようになり、アメリカでもまだ珍しかった変化球(カーブ)を習得して人気者となりました。1876(明治9)年4月にはペン

シルベニア州フィラデルフィアにあった名門のボールドウィン・ロコモティブ会社に転じたのち、同年6月に帰国の途につきました。

#### ■ 新橋アスレチックの結成

5年ぶりに日本へ戻った平岡は、伊藤博文の斡旋によって同年12月、工部省に採用されて鉄道三等小師となり、翌年2月には鉄道局工部三等技手に進みました。また、新橋駅のプラットホームでアメリカから持ち帰ったローラースケートを披露して駅夫たちを驚かせたほか、職場の仲間や学生の同好者を集めてアメリカ土産の野球用具で草野球を始めました。

そして、1878(明治11)年に新橋倶楽部と称する野球チームを結成し、「新橋アスレチック」(対外的には「東京アスレチック」とも称した)のニックネームをつけました。しかし、グローブやバット、ボールなどの用具が足りなかったため、工場で自作したと伝えられます。

平岡はクラブの発足と同時に品川の八ツ山(新橋駅構内とも)の鉄道用地に「保健場」と称する球場を設け、ここを本拠地として駒場農学校などと試合を行いました。平岡の投げるカーブは「魔球」として恐れられたほか、のちに第一高等中学校で野球に熱中していた正岡子規もクラブの一員に加わりました。明治10年代の後半になると、ヘラクレス倶楽部、溜池倶楽部などのクラブチームが設立され、さらに学校チームが結成されるようになって、平岡は指導者としてこれらの活動を支

援しました。

1882(明治15)

年6月には鉄道局 錦糸町に移転した頃の平岡工場<sup>5)</sup>

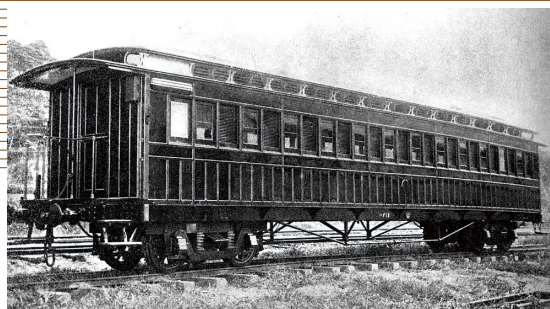
器械課勤務とな

り、同年8月には埼玉県の川口に出向き、日本鉄道が輸入した蒸気機関車の組み立てにも従事しました。1883(明治16)年7月には汽車課長兼新橋工場長となり、さらに1885(明治18)年には鉄道権少技長、その翌年には鉄道四等技師(奏任官四等：現在の本省課長級に相当)と進みました。

新橋工場長となってからも平岡は野球を続け、1888(明治21)年には新橋アスレチックの活躍や平岡の功績が「シカゴ・トリビューン」紙で大きく報じられました。この記事に感激したアルバート・スポルディング(プロ野球選手で、スポーツ用品メーカーのスポルディング社の創始者)は、最新の野球用具やルールブックを平岡宛に無償で贈呈し、将来は野球を通じて日米で競いたい旨を記した激励の手紙を届けました。しかし、本業の新橋工場の業務が多忙となったため、この頃を境として新橋アスレチックの会長を実弟の平岡寅之助に譲り、野球界から退きました。

## ■ 平岡工場の設立

平岡は、1889(明治22)年12月に鉄道局を辞して、翌年3月に小石川の砲兵工廠内を借用して鉄道用諸車そのほか器械器具を製造するための平岡工場を設立し、同年8月に認可されました。平岡工場では、鍛工、木工、鑄工の3工場を設けて鉄道用品や鉄道車両の製造を開始し、陸軍省の要請で兵器の製造、修理にもあたりましたが、工場の借用期限は1896(明治29)



平岡工場で製造された客車・九州鉄道「ハブ18」<sup>5)</sup>

年3月末であったため、東京市本所区錦糸町に新工場を建設して移転しました。平岡工場は客貨車の製造を専門とし、1901(明治34)年に大坂汽車製造に統合されるまで、客車約350両、貨車約1250両を製造しました。

一方、1896(明治29)年、大阪に汽車製造(のちに大坂汽車製造に改称)が設立され、鉄道局長官を退いた井上勝が社長に就任しました。井上は、東京への進出をめざして平岡工場との合併を促しましたが、会社の経営が順調であった平岡はこれに応じず、副社長に就任して大坂汽車製造の経営にも参画しました。しかし、平岡工場との兼務では十分に活動できないと判断し、1901(明治34)年には平岡工場と大坂汽車製造が合併して、ふたたび汽車製造となり、平岡工場はその東京支店となりました。大阪の工場では機関車や橋梁の製造が行われましたが、東京支店は客車、貨車、電車の製造を専門とする工場として機能しました。

## ■ 平岡大尽と呼ばれて

平岡は、遊興に金銭を惜しまない性格で、粋で気っ風がよい「江戸っ子」の気質を失わず、謡曲の世界では明治時代に流行した東明流の創始者(号は「吟舟」)としても知られ、周囲から「平岡大尽」と称されました。

1909(明治42)年に汽車製造副社長を退任した平岡は、鉄道用品製造共同事務所の理事長となりましたが、1912(明治45)年にはこれも辞し、芸道に没頭する日々を過ごしました。

1923(大正12)年の関東大震災で被災して蒐集した工芸品のコレクションなどを失いましたが、「宵越しの金は持たない」という信念を守り続け、遺族への生活費を残したのみで1934(昭和9)年5月6日に他界しました。

平岡工場が創業した砲兵工廠の跡地にある東京ドームシティには、日本の野球界の功績者を讃えた野球殿堂博物館がありますが、平岡は日本に野球を輸入した功績が評価され、1959(昭和34)年から始まった野球の殿堂の第1回で、正力松太郎や沢村栄治とともに特別部門の一人として選ばれました。平岡は正規の技術教育を受けませんでしたが、アメリカの機関車製造工場で実務経験を積み、帰国後は日本の鉄道車両の国産化に貢献しただけでなく、趣味を通じてそれぞれの分野に新境地を拓きました。

## 文 献

- 1) 平岡熙：工業振興策， 實業之日本， Vol.5, No.8, 1902
- 2) 榎 醉：平岡熙の人物， 實業之日本， Vol.6, No.23, 1903
- 3) 高橋義雄：平岡吟舟翁と東明曲， 秋豊園版， 1934
- 4) 五十公野清一：日本三球人， 世界文庫， 1968
- 5) 汽車会社蒸気機関車製造史編集委員会： 汽車会社蒸気機関車製造史， 交友社， 1972
- 6) 君島一郎：日本野球創世記， ベースボール・マガジン社， 1972
- 7) 鈴木康充， 酒井堅次：日本で初めてカーブを投げた男， 小学館， 2000
- 8) 堤一郎：平岡工場と創立者平岡熙， 日本機械学会2002年度年次大会講演論文集(I)， 2002